

保険と共済 (2) 日本医師共済生命保険相互会社

ピアニストの宮沢明子が4月23日に亡くなった。2016年に亡くなった中村紘子とほぼ同じ戦後世代で、わが国のクラシック音楽を隆盛に導いた貢献者のひとりであった。モーツァルトのピアノソナタ全集など印象深い名録音があるが、とくに愛聴しているピアニストではないと思っていた。しかし、亡くなってみて、あらためて所蔵のレコード・CD類をあらためて整理してみると、意外とたくさんの音源があった。バッハ、ハイドン、モーツァルトから、ベートーベン、シューベルト、シューマン、リストを経て、バルトークの録音もある。古典派とロマン派が中心ではあったが、幅広いレパートリーを持つ素晴らしい演奏家であった。

5月の少し時間がある時に何枚かの録音を聴いてみた。ハイドン、モーツァルトはともかく、シューベルトのソナタ(13番と14番)は素敵だった。ウェーバーの「舞踏への招待」などが収録された、小品を集めたレコードも楽しめた。子供の頃このようなピアノ小品にどれだけ惹き付けられていたのかということ懐かしく思い出した。彼女の魅力は、譜面を通して音楽が鳴っているのではなく、身体から音楽が響いているところだ。偉大なコンサート・ピアニストのご冥福をお祈りする。

本日のテーマは、人間の健康と結びついた職業の医師である。わが国では、だれでも開業医に自由に診察してもらえる。開業医は場合によっては大病院に紹介状を書くこともある。また直接病院に行くことも可能である。さらに緊急の場合は、救急医療により最寄りの病院に搬送される。このような仕組みは書くまでもないことであるが、諸外国においては、同じような仕組みであるとは限らない。

わが国の特徴は、開業医が多いことであるが、これはある種の「経路依存性」(歴史的な経緯)がある。明治期には「医業」という言葉が使われていた。このことから推察するに、当時は現代考えられている以上に医療のビジネスとして側面が強く意識されていた。明治初期に医政が固まり、西洋医学が支配的になることは、全国で在来医として医術を開業してきた漢方医にとって大きな脅威であった。

従来の日本の医療は地域で開業している漢方医によって担われていたといっても過言ではなかった。そのため、明治政府は、近代化の方針に則って、漢方医を排し西洋医を重んじるにしても、地方で医術を業としてきた在来医の存在を無視することはできなかった。そこで、近代的な医政が定められた後、激減緩和措置が実施された。たとえば、従来の漢方医の資格を剥奪せず、在地開業に限って許可する方針を採用した。さらに医術開業試験において在来医には特定の優遇をおこなうなどし、在来医の西洋医への転換を進めた。その結果、地方には開業医が数多く残ることになり、わが国の医療ビジネスは、明治初期から開業医を基本とするという産業的特徴をもった。明治中期に発行された、医籍録によれば、全国に5万人もの開業医が存在していたのである。

他方、研究機関としての大学や医師養成のための医科専門学校が設立され、前者は開業医

に対して先進的な医術を提供し、また後者は開業医の後継者を生み出した。大学の医学部を頂点としてすそ野に開業医をもつという特徴は、すでに戦前に形成されていたのである。医政の成立から医師会の創設までの概要については、すでに詳細が明らかにされているので省略する。(たとえば、米山高生「日本医師共済生命保険相互会社の設立と経営(1)(2)」一橋大学研究年報「商学研究」2005、2006年を参照。)

ここでは全国の開業医の医業を支える共済施設として、設立された生命保険会社について簡単に紹介することにする。開業医による「業界団体」として医業を守るために設立されたのが日本医師会であった。日本医師会が設立される経緯は複雑であるが、業界団体という性格は、少なくとも大学の医師や公衆衛生を担う政府機関に所属するプロフェッショナルな医師の多くが加入していなかったことから明らかであろう。ここで会長に推挙されたのが、優秀な医師であるにもかかわらず、在野の立場にあると思われていた北里柴三郎であった。日本医師会は彼の名声とリーダーシップによって結成されたのである。日本医師会の設立理念の一つは、その設立経緯から開業医の生活を守るということであったことが推測できる。この理念のもとに生まれたのが、全国の開業医による生命保険会社の設立発起であった。

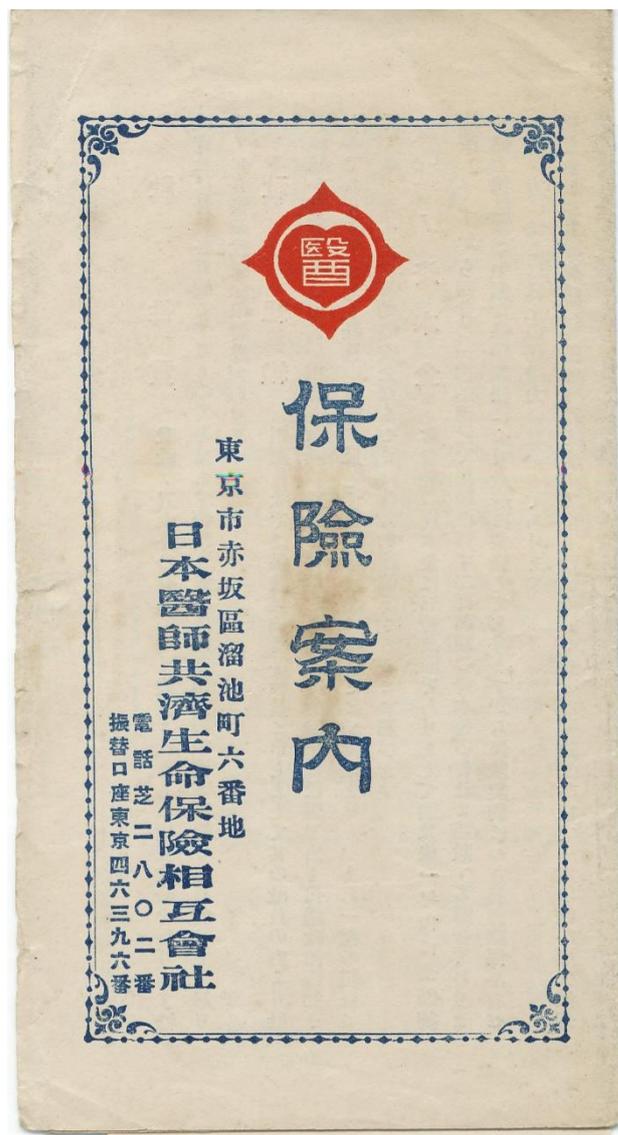
じつは医師と生命保険は近代生命保険会社が誕生した頃から深いつながりがあった。生命保険契約時の医的診査には診査医が必要であるが、初期の主要な生命保険会社は出来るだけ高名な医師に診査医を依頼した。また医師の中には診査医として会社の嘱託となったり社員となったりすることを選択する者もあった。このようなことから、医師にとって生命保険という事業はまことに身近なものであった。しかし全国の開業医による医師会が成立するまでは、開業医にとって、生命保険会社は診査医という仕事を依頼してくれる雇い主という程度の位置づけであった。

全国5万人近くの開業医が医師会のもとに結束すると、この5万人を顧客とする生命保険会社を設立することに市場機会と見るものが現れた。そこで八木逸郎という医師が中心と名手生命保険会社の設立が試みられ大正8年10月に日本医師共済生命保険株式会社として開業した。

採用する企業形態は、相互会社とした。これは、株式会社として市場から資本調達するよりも、全国の開業医が基金を出資するという形態の方が、設立の趣旨に合致していることであった。さらにいえば、基金出資者としての開業医自身が保険契約者になることが期待されており、また医業をとおして新契約者の募集することも期待されていた。社名に「共済」という用語が挿入されたのは、全国の開業医が基金を拠出しあって、自分たちの生活を相互扶助する仕組みであるということ強調したと思われる。蛇足であるが、「共済」を社名に挿入したために、同社は戦前の生保会社でもっとも長い社名をもつことになった。社名の長さにおいては、現在では、「損保ジャパン日本興亜ひまわり生命保険株式会社」に抜かれている。長いことは必ずしも良いわけではないということで、同社は、本年10月1日をもって「SOMPO ひまわり生命保険株式会社」と商号変更すると発表している。

「共済」という名称が使われた社名は、わが国の生命保険史において、前回の連載で言及した「共済生命」の他、「戦友共済」の三社である。「共済生命」は企業形態としては合資会社（後に株式会社に組織転換）であったが、前身組織「共済五百名社」を発展的継承したものであったことに由来するものであった。「日本医師共済」の場合は、相互会社であったこと、しかも開業医が相互扶助のために基金を拠出して保険会社を設立したということを表現するために「共済」という言葉が使われたのである。

同社は、設立後そこそこ順調な発展を遂げていたが、昭和8年に他の相互会社4社と合併して昭和生命となった。他の4社のうちには破綻寸前の会社が含まれ、この合併はある意味では救済合併的な側面があった。また設立後の取締役会が各社から代表がでており、合理化に対する推進力を欠くものであったため、経営内容が良いといえなかった。同社が、社名のごとく開業医の「共済」に専門化して、経営基盤を堅固にすることに注力していれば、中堅ながら戦後まで存続する会社となりえたかもしれないが、昭和生命は、最終的には戦時下に第一生命に契約を包括移転して生命保険史から姿を消した。



初期の募集史料。本社を芝田村町に新築する前の溜池町の住所が記載。



創業時の社長である医師八木逸郎





## 保 險 も 貯 蓄 國 策 に 順 應

詩 たい 種 は 育 て よ

### ◆契約者にとつて

一回掛けただけで保険を捨てることは、折角將來の爲めに蒔いた種子をふみにじると同様です。二回後を掛けてこそ双葉ともなり可愛さも増して三回四回と知らず知らず掛け続け花も實も結ぶ事になります。

一回掛けたら必ず二回、三回と掛け続けることが肝要です。

### ◆代理店にとつて

足と汗と力によつて折角得られた保険も一回だけで掛捨になる事は目前に轉つてゐる寶石を埋めると同様です。之を拾つて磨けば自然に光も出て寶石の値打も増します。二回の掛金が濟みますと三回、四回は比較的容易に拂込まれます。

二回後の拂込は寶石に磨きをかける様に肝要です。

### ◆會社にとつて

代理店と従業員の血と汗の結晶である保険も一回だけで捨てられる事は多大の費用と努力が全然無駄となり所謂骨折損の草臥れ儲けに終る事になります。

二回後の掛金は社業上の重要な源泉で加入者奉仕への活力素ともなり會社進展上肝要です。

東 京 昭 和 生 命 保 險 有 限 公 司

五社合併は破綻寸前の相互生命保険会社を救済するという行政の意図に協力するものであったが、戦時期には他社と同様、国策に従つて国民貯蓄を促す態度を明確にしている。